

24日
25日

鶴の寿

藤舎呂英連中

藤舎 呂英

邦楽の囃子方は、笛・小鼓・太鼓・大鼓の四種類の楽器を中心に、多くの助奏楽器を用いて演奏します。その本来の役割は、唄われ、浄瑠璃で語られる風景や物語の世界を様々な時間軸に沿って進行させ、止ませ、走らせ、また一方ではその世界のイメージを助け、確定し、膨らませます。

今回、国立劇場大劇場における「日本の太鼓」公演の開催に際し、国立劇場開場50周年を寿ぐ、をテーマに新作邦楽囃子の委嘱をされました。そこで「太鼓」という楽器を軸に、三味線音楽とは異なる「囃子音楽」なるものを舞台上に創り上げ、さらに耳で聴くだけではなく、視覚的にも囃子の魅力を伝えることができる、そんな舞台構成を試みました。

祝儀曲ということで、当初は能の『式三番』をモデルに考え始め、『鶴寿三番叟』という演目にするつもりでした。ただ「三番叟」とあるとどうしても鼓主体の曲となってしまうため、「鶴の寿」と題して、太鼓中心の曲として作調を始めました。

第一章……まず鼓の合奏での幕開きとなります。雪景色のなか、一羽の鶴が現れる。ここでは鶴が雪の中で静かに佇み、優雅に舞い遊ぶ姿を様々な音で描きます。

第二章……荘厳な朝焼けの中、鶴の一声が響き渡ります。時が経つにつれ次々と舞い降りた鶴は幾干にもなります。やがて、静かな場面から、太鼓の音がさらなる強さを織り込みながら重なり、次第に壮大の景色となります。

第三章……最後は、「五穀成就」「御代太平」いつまでも文化が栄え、国が栄えることを願って唄う声が重なり、終曲となります。

この曲には唄が入ります。唄と囃子のみの構成というのは通常あまり行うことのない



藤舎呂英

い組み合わせですが、この度の「日本の太鼓」というテーマから、「音」というものを見直した時、唄は人間が発する「音」であり「音楽」の原点ではないかと考え、構成に唄を組み込むことにしました。また、同じく演奏の中で囃子方が発する「掛声」も情景を描く重要な役割を持っています。私は「掛声」は人間の「気」や「呼吸」を使つて発する一つの表現方法だと考えています。指揮者を有することなく音楽を成立させることができる重要な「掛声」という音にも注目していただきたいと思います。

宗家藤舎せい子に師事し、没後、六世家元藤舎呂船に師事。東京芸術大学音楽学部を卒業後、「藤舎呂英」の芸名を許される。その他、放送・舞台（舞踊公演・長唄演奏会等）、海外公演等、幅広く音楽活動を行う。また、鼓のソロ演奏や、各邦楽器および、チェロ、ピアノなどジャンルを越えた様々な楽器とも演奏活動を行い、新曲の作調も多数行っている。その他、CD製作や小学校等の学校巡回演奏、学校教材DVD制作にも多数携わる。平成十六年、アテネ五輪シンクロナイズドスイミング日本代表チーム競技曲「Japanese Soul」で、小鼓を演奏。平成十八年、日本伝統文化振興財団賞受賞（同時にビクターよりCD発売）。平成二十八年、ももいろクローバーZのライブに参加。真しほ会、青壽会、同人博多検番、長崎検番専属師匠いしかわ子供邦楽アンサンブル講師